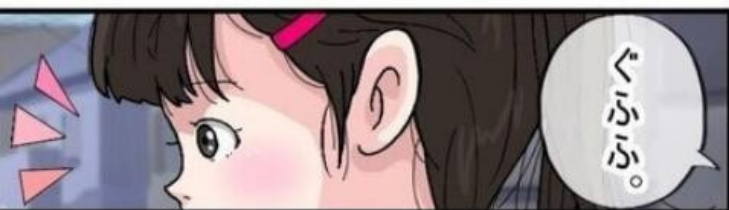


少女のわずかに浮かぶ胸の膨らみに
群がるオジサン達









ぐふふ。



お母さん、おじさんの
所に遊びに行っ
てくるね。

え、また？
気を付けて行っ
てらっしゃい。



おおっ！



何処にでもいる
ロリ好きジジイ。

・・・ぐふふ。

兄貴の娘、結愛は学校が
終わると毎日俺の家に
遊びに来る。
内向的で友達付き合いも
苦手な感じで大人しい。



しかも兄貴の娘なのに、誰に似たのか
この辺りではトップクラスに可愛い。
ロリコン中年オジサンの憧れの
小学六年生である。
まあ、大人の女性に全く相手にされない
俺にとっても天使のような存在だ。

俺の望みも
聞いてくれて

タッ
タッ

「今日は短めの
スカートを来てね」
って言うと、ちゃんと
その恰好で来てくれる。

おじさん
遊びに
来たよお。

お帰り結愛、
今開けるから
待ってて。

ピン
ポーン





……え？
私まだ小学生
だよ？

ぎゅっ

世の中のオジサンは
結愛のスラリとした
生足とか微妙に
膨らんだ胸を見て
興奮してるんだよ？

でも、結愛は無意識に
生足を出して
中年オジサンを誘って
たんだよ？

だって……
おじさんが
着てこいって
言うから……

それが凄く
価値のある
事なんだよ。

恥ずかしくて嫌だけど……
短いスカートで生足を出して
来てくれたんだよ？

……うん、本当はここに
来る途中も変なオジサンに
見られてたし、こんな格好で
学校に行くと結愛の事、
先生がジロジロ見てる
時とかあるよ。

先生にパンツ
覗かれたり……？
本当は期待した？

やだ……
そんなわけ
ないよ……

ムラッ

ズン





真っすぐ立って。

……こう？

結愛は今日、短いスカートを履いてってライン見た時からホントは気付いてたでしょ？

あっ……

……えっ
何が……？

いっ……

こうやって生足を出して、周りに見られてるって……分ってたでしょ？

……

そうそう、後ろの方も見てみるね。

うん。

……でもさあ……

違うじゃないよ……学校でも先生に生脚やパンツを見られてるって意識してたじゃん。

びっ……

……っ

結愛は見られたかったんだよ。

むにゅ

むにゅ

ち、違うよあ……！

いっ……



認めなよ…、結愛は
自分のパンツや太ももを
見られたかったんだよ？

絶対…違うよ…

…でも…
おじさんは
言っていないん
だよ？

…結愛は、
…見せて
ないよ…

知らないオジサンや先生に
パンツを見せろって…



自分で考えたん
だよな？

…うん…

足とパンツを
見られたの…



結愛なりに
考えたんだよね？
どうやって
パンツを…
見せようかって
自分で考えて

あ、あれは…





思いつき尻の穴を、
広げたり出来るん
だから(笑)



：：やあつ！
おじさん広げ
すぎだよお！



：：おじさん感動だよ：：

現役小学生のマスコを
息がかかる程間近で
見れて：：：。



：：そうだよ、結愛の
未成熟な胸の膨らみや
スラリとした生足を
見てオナニーとか
してるんだよ：：？

オナニー？

：：ねえ、おじさん、
本当に先生とか他の
大人の人って結愛に
こう言う事したいと
思ってるの：：：？













…あああ、うう…
肛門をヒクヒクさせ
ながら一生懸命舐めて
凄く可愛いよ…

…んう…
…結愛の…
オマンコ凄く
美味しいよ。



ああ：結愛の手は
柔らかくて気持ち
良いよ…

…今度は握って…



ああ…良いよ…
由香…凄くエロくて
気持ち良いよ…

はあ…
ふはあ…





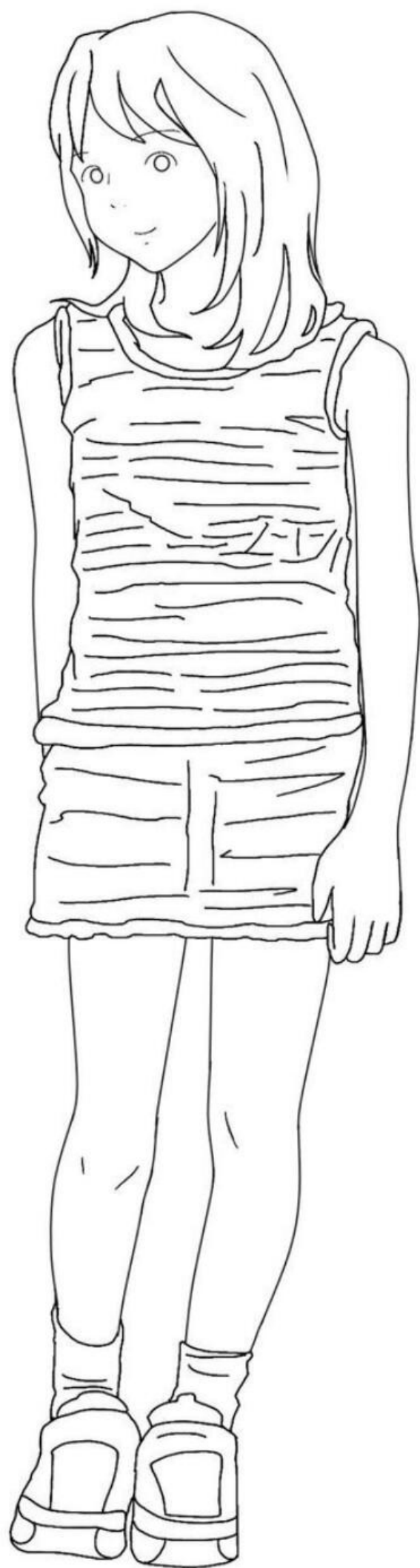
：あがあっ……！
結愛！中に沢山
出してあげるからね！





触手・変な教室。





キンコーン カーンコーン

さよならー、
じゃあねー。

さよならー、
また明日ねー。

…ああ、もう。
何で私だけ居残り
なんだろう…。

昼間の騒音がまるで嘘のように
静まり返った夕暮れに近い放課後の舎内。
真っすぐ伸びる廊下とそこに並ぶ教室には
人影は無く、時折聞こえてくるのは教師か
または居残った生徒が立てる音のみ。

誰も居ない教室で、
沙耶はつぶやいた……。
先週から担任の補佐として
新人の研修生に居残るように
言われたのである。

……ついてないなあ。
今日見たい放送あった
のになあ……。

沙耶の担任は風邪で休職中でその間、
変わりに研修生が沙耶の学級を受け持つ
事になったのである。

最近、沙耶はその先生に目を付けられている
かのように、毎日注意をされていた。

遅いなあ……。

私、研修の先生に
嫌われてるのか
なあ……。

はあ……。

ガラ

ビク

沙耶さん！

沙耶がボーっと
考え事をしている隙に、
いつの間にか
教育実習生の
担任が教壇の上に
立っていた。

あつ、先生！
まっずう！

ほら、ほら！
また、ボーっとして
いけませんよ。

沙耶は十二歳。
小学六年生の高学年。

ボーっとしてる所、
先生に見られちゃった。

世の中の口り好き
には理想的な
身体付をしている。

成長途中の膨らみ
かけた胸。

スラリとした健康的な脚。

聞いてますか？

はい。

教育実習生は必要以上に、沙耶の生活態度について長々と注意をした。その間、まで沙耶の身体を隅から隅済み舐め回すように観察していた……。

何故、居残りさせられたのか解ってるんですか？

じと

そうやって何時も弛んでるからですよ！

じと

どうしてこの先生にこんなに厳しいんだろう……？来た時からずっと私の事見てるし……。

すみません……。

勿論まだ自分の身体の成長なんか全く気にしてない沙耶はその視線に気が付いていない。

くどくど

……すると、突然辺りの景色が暗くなり始め、女の顔がドロリと変化し崩れ始めた。

本当にいけない子ですね。

ドロ……

……貴方には別な教育が必要ですね……。

ビク

……えっ？

!!



私、何時もあなたの事を舐め回すように見てたのよ……。成長途中のプクッと膨らんだおっぱいや小さなお尻を……。

あ、お早う！

先生お早う
ございます。

廊下を通り過ぎる度に
どうやってそのおっぱいを
揉み回してやろうとか
お尻を舐め回したり、
オマンコや尻の穴まで
犯してやろうかって……。

女の一目を見つめると
沙耶の身体が硬直し、
身動きが出来なくなった。
無数の粘液に包まれた触手は
沙耶の身体に伸びて行き、
全身にまわりついて
行った……。
何とか瞳は動かす事は
出来たので触手が伸びて
行く方向を目で追って
行くがその悍ましさに
沙耶は寒気を覚えた。

ふう……
ふう……

え、え？
か、身体が
動かない
よお……!!

ウフフ、貴方には
この方法でタップリと
教育してあげるわ……。



憧れの沙耶ちゃんの……

……おっぱい。

……太股。

やがで触手は、
沙耶の服の中に
潜り込み地肌を
這いまわった。

……足首



先生……
もうこんな事
やめてください！

想像以上の
沙耶の味に目が
らんらんと
輝いている。

うふふ……、凄く
美味しい……！

そう言い
ながら顔を
離すと、
沙耶の口と
女の口から
唾液の糸が
伸びる……

顎、腕、脚、髪の毛などから
粘液が垂れ糸を引く……

更に無数の触手が服の中で
小さな突起を探り摘み上げる。





沙耶の未成熟な胸を味わいに尽くす様に絡みつく。

「ホントにいい匂い...」
身体を被う布がなくなり
女はより強い沙耶の
臭気を感じとって
それは女にとっでは
身体もとろけるほどの
甘美な香りだった。
あち...



可愛い
おっぱい...
はあ
だうあ...



身体が自由な完全な沙耶の身体を
きかなくを捲り上げた
触手が胸を膨らませる
眩しき幼い胸が膨らみ
その緩やかな膨らみを
絡みつかう
あちや...
あち...



いよいよ我慢
出ない女は
なからペニ
口を触る
吐き出した

ずるっ



ズッポッ
おーおー
味タッ
わっ
ぷて。
そう言うとき
沙耶の小さな
口にペニスを
突っ込んだ。
あち...



完全に意識がなくなった
わけではなく、快感と意識が
入り混じった中で男のペニスに
似した触手が沙耶の鼻先に向けられた。
酷い匂いと黄ばんだイカ臭いカス
が剥け始めると
皮がシリと黄ばんでいた。
こびり付いていた。
あち...
あつ...
く、臭いっ...
ムキキ
ぷらん
ピクッ
ほうら、先生の
オチンチン臭い
でしょう？
あち...



あまりの異臭と悍ましさ
思わず身を悶える沙耶。
そして、触手はスカートの
中にまで伸びて行く。
あち...



あばく

痛みはない。痛みはないが。かわりにくすぐられる感覚が下腹部から沸き起こっていた。

ぶっぶちゅちゅく

それは沙耶の身体に起こる初めての感覚で、声を堪えようとしても、予想のつかない感覚に半場無理やり艶かしい声をあげさせられていた。

どう？沙也加ちゃん、気持ちいいでしょ……？……オマンコ。

やはああ……

ちゅぶくちゅ

触手が肉壁に張り付く白い幕をツンツンと突く。

ぬち

びくん

ぬち

びくっ

ぬち

べる

身体中を時間をかけ何度も舐められたおかげで沙耶の身体はねばつく粘液にまみれていた。

お

にちやあ

……脇の下も美味しい……。

びくっ

びくん

熱のこもった声をあげながら、触手から逃れようと自由のきかない華奢な身体をクネクネと動かす。可愛らしい小さな尻が、女の目を楽しませるかのようにプリプリと震える。

「べっ……」

んっく

ぬちゅ

ぬちゅ

「べっ……」

ふぐ……う……

ぬちゅ

くちゅ

ぶちゅ

くちゅ

ぬちゅ



ぬち

あれー？ウンコの味がするわよ？お尻ちゃんと拭いたあ？

「ど……どうして……こんなに嫌なの……」

ビ
ク
ン

「気持ち良い
んでしょ？」

ね ね ね
え え え
? ? ?
」

んあ？

ぶちゅ

ぬち

あ
っ
ん

ん
ふ
う

ぬ
ち

ヒ

故

規則的な触手の
動きに、変わって行く
沙耶の反応。
その声もだんだんと
官能を帯びたものと
なってくる。

奴才

はあ

女の触手には無数のツブツブが付いていた。

この：ブツブツが良いんでしょう？

やっ!!

やあん!!

ちゅぶ

ちゅく

ぐちゅ

はあん!!

やあ!!

うね

うね

うね

うね

助けて！お母さん……!!

んあっ

ぶちゅく

くちゅぶ

はっ

ずりゅ

ずりゅ

あん!!

ああん

無駄よ、貴方の心の叫びは誰にも届かないわ……。

女は沙耶の心の声も読み取る事が出来た。女の術で正気を奪われた。たまらない屈辱と、いくら頭では否定しても、身体が反応している事も。

……ほうら、もうイキそうなんでしょ？

ぐちゅぶちゅくちゅ

ぶちゅ

くちゅ

ぺろ

ぺろ

んふ!!

んう!!

んん!!

くちゅ

くちゅ

沙耶の内なる抵抗も空しく、少女の身体は着実に女としての喜びに目覚め、一步一步官能の階段を登りつめていった。膣壁の収縮具合を触手で感じ取り、女は沙耶の絶頂が近い事を知った。

グッ

んぐ!!

グッ

グッ

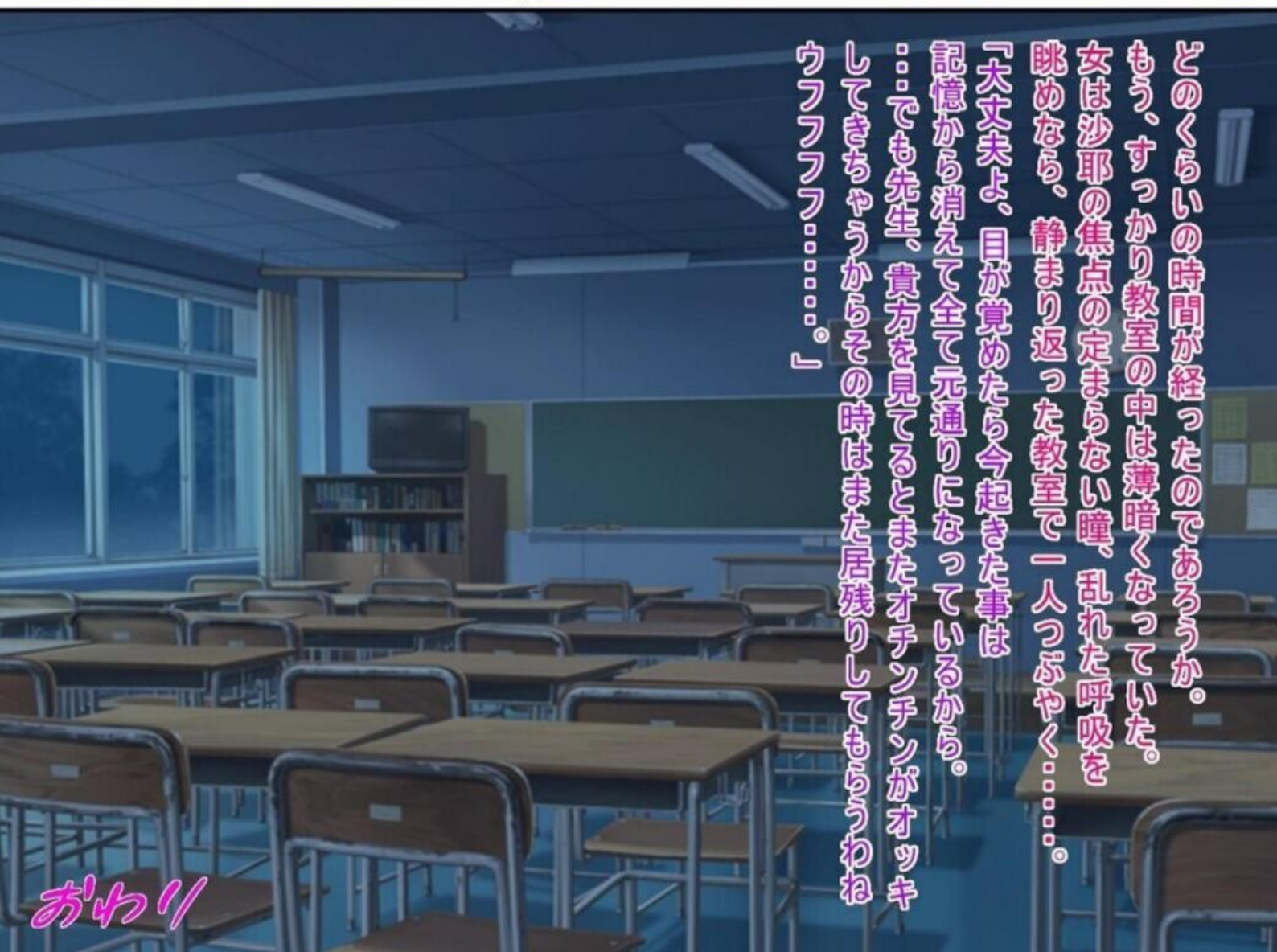




：最高の味
だったわ……。



絶頂に達し、小さな胸をせいぜいと
動しながらぐったりと身体を時折、
ピクン、ピクンと反応させていた。
沙耶の全身は女から吐き出された
大量の精子と粘液でドロドロになっ
ていた。女は満足した笑みを浮かべ
やっと沙耶を床におろされた。



どのくらいの時間が経ったのであろうか。
もう、すっかり教室の中は薄暗くなっていた。
女は沙耶の焦点の定まらない瞳、乱れた呼吸を
眺めなら、静まり返った教室で一人つぶやく……。
「大丈夫よ、目が覚めたら今起きた事は
記憶から消えて全て元通りになっているから。
……でも先生、貴方を見てるとまたオチンチンがオツキ
してきちゃうからその時はまた居残りしてもらおうね
ウフフフ……。」

おわり

忘れられない記憶



こたつぽとん

忘れられない記憶がある。
どんなに忘れようと思っても
決して消えることない記憶……。

あれから何年も経つのに
忘れることが出来ない……。



家族で買い物に行った
帰りに、自動車同士の
衝突事故にあい



私は両親を
失った……。

私は近親者がなかったので
孤児院で暮らすことになった。

私は本当に孤独だった……。



私は両親を失ってから数年間
ここで暮らした。
楽しい事なんて全くなかった。
早く大人になってこんな施設から
抜け出したかったが、
子供の私にはどうすることも出来ず
規則正しい生活を繰り返す毎日だった。

恐らくここで勤めてた人たちは
ただ給料を貰う為、事務的に
淡々と仕事をしていただけなのだ
温もりなど感じたことは一度もなかった。

ある日私は職員の人に
呼ばれた……。

実は貴方を
養子にしたい
という方が
居るの……。

……養子？

大きな会社の社長で
有無も言わず私は
その養子にしたいと言った人に
引き取られることになった。

施設側としては引き取り手が現れ
審査して合格すれば孤児などサツと
出で行って合格すれば方がいいのである。

……この太った醜い男が
私の義理父だった……。

お父さんが愛して
いるのはお前だけだ……。

私は事故の後遺症で足の神経を
圧迫してしまった。

義理父は有名な医者を屋敷に呼んで
お金に糸目を付けず足の治療をしてくれた。

今では全力で走ったりする
のは難しかったが

日常生活は
問題なく過ごせた。



奇跡的に私は命に関わる
怪我ではなかった。

私はお屋敷のような家で娘として暮らすことになり、義理父に大事に育てられた

施設とは大違いで、夢のような暮らしだった。



お菓子なんかも施設ではたまに寄付されたものが配られたりする事があったが毎日食べる事は出来なかった。



それに比べて新しい家では毎日お菓子どころか豪華な料理を食べることができた。

それどころか私の部屋まで義理父は与えてくれた。暖かい部屋、食事、もちろん学校も通わせてくれた。一般の家庭よりも生活基準が遥かに上だった。

.....私はとても幸せだった.....。運が良かったと思う.....。.....私があある年齢に達するまでは.....。





人の気配がする……
義理父さん……？



この家にも慣れ、
私がジュニアハイスクールに
上がる頃の事である。
部屋で居眠りをしている時、
それが起こった……



す……



聞き覚えのある
鼻息の音で
私は直ぐに解った……



義理父さん
何をして
いるの？
私は怖くて
寝たフリを
していた……



シンとした
部屋に荒い
鼻息だけが
聞こえる……

あの日以降、
義理父の行動は
エスカレートして
いった……。

ぬう……

はあ

勉強中かい？

はあ

はあ

ドキッ

……えっ……！
あっ……あ……え？

私が家の図書室で
読み物をしていてと
いつの間に背後に立ち
黒光りした醜いモノを
私にこすりつけて来る時も
ありました……。

なう！？

私は義理父の求めに従うしかなかった。
それに、私が言う事を聞く良い子であればあるほど、
義理父は機嫌良く過ごしてくれるのだ。

お前は私を裏切ら
ないな……？

だから、私が義理父の
言う事を聞くだけで

すう……

……私はジュニアハイスクールを
卒業するまで数えきれないほど
求めに応じた……

その……歪んだ愛情に……

ああ……愛おいしいよ。

……

はい。

……さあ……、
お父さんにパンツを
見せておくれ。



はあ
はあ
はあ

・・・さあお父さんに
裸を見せておくれ・・・

はあ
はあ

ム
ム
ム

ム
ム
ム

ピ
ッ

ッ
ッ
ッ



そして私が十二歳になった時に、
その日が来ました・・・

・・・



その時、私はハッキリと悟りました
義理父は私が十二歳に達するまで
優しい父親を演じ続けていた事を・・・

・・・はい。

誰にも見せた事のない私の身体を
義理父が食い入るように見ている…。

はら…

思春期を迎えたばかりの私の裸を
義理父はいやらしい目で蛇が這う様に
隅々まで見ていた…。

かああ

この広い部屋中に聞こえる
んじやないかと思うくらい
義理父の息が荒くなっている
のが分かった。

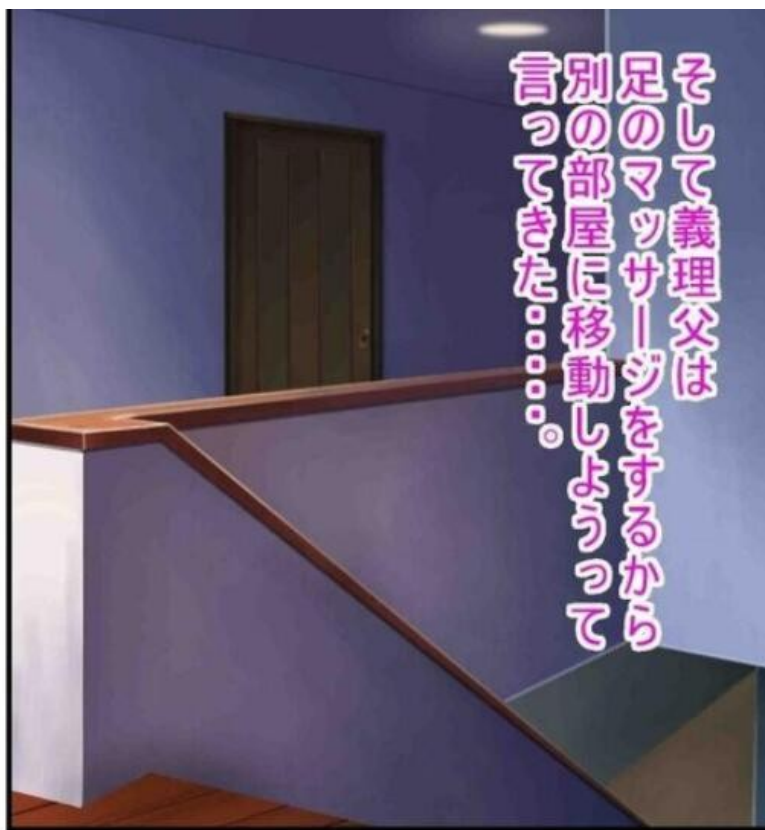
んう…

…ああ、美しいよ。

…最近膨らみ始めた胸も
義理父に見られてしまい、
私は舐め回すような視線に
恥ずかしさと嫌悪感を激しく覚えた。

がが？！

そして義理父は
足のマッサージをするから
別の部屋に移動しようって
言ってきた。。。。

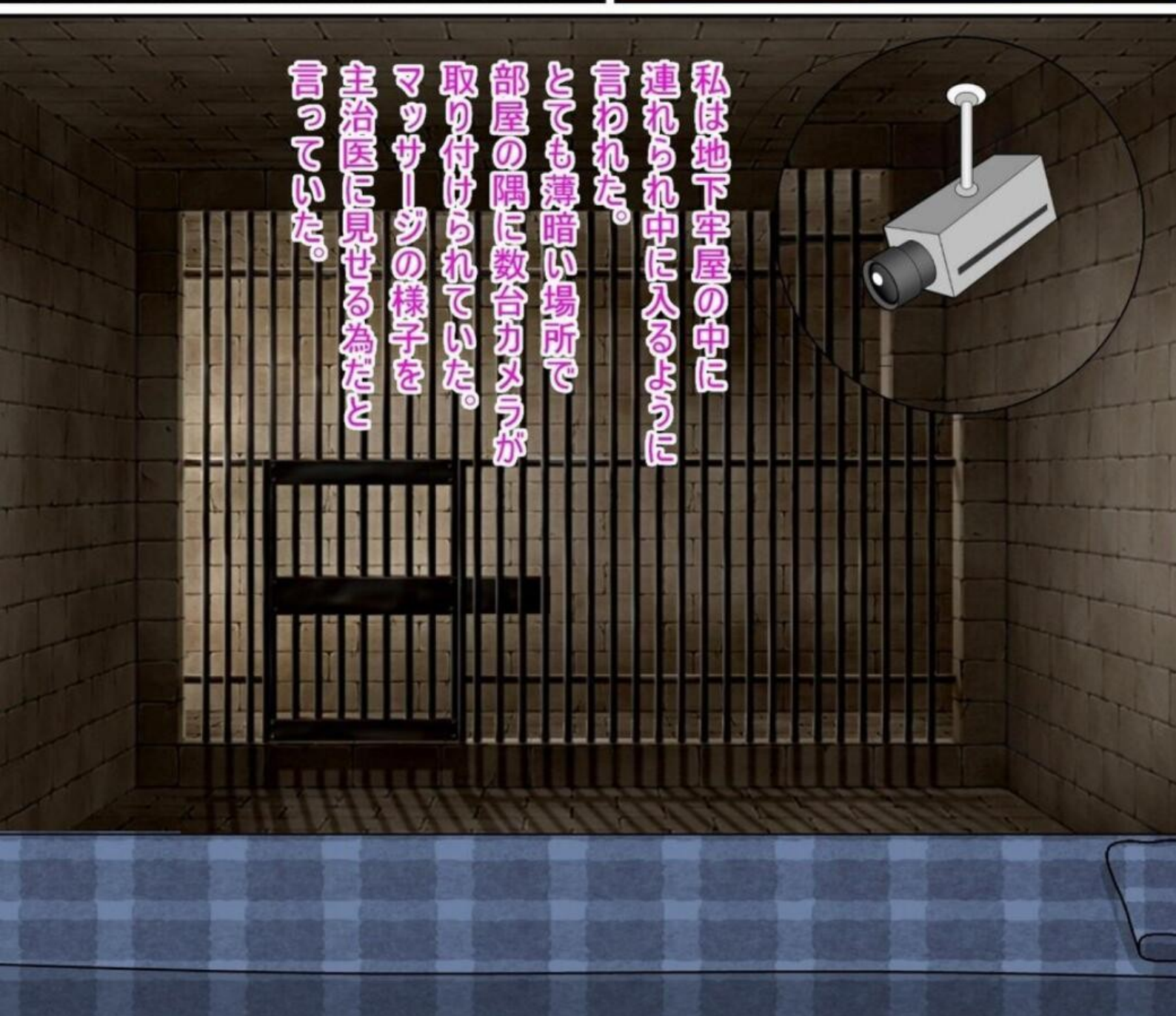


屋敷の中にこんな地下に
通じる階段があったなんて
知らなかった。。。。
何処までも続く暗い階段。。。



私は地下牢屋の中に
連れられ中に入るように
言われた。

とても薄暗い場所で
部屋の隅に数台カメラが
取り付けられていた。
マッサージの様子を
主治医に見せる為だと
言っていた。





更に本格的な全身マッサージを
すると言って、ベッドに横になるよう
命じられました。。。。。

。。。。

さあ、ベッドに
横になって。



これも足が良くなる
為にやる事だからね。

。。。はい。

私が横になると、
それに合わせて
カメラも動く。。。。。



続きを
始めるよ。

はい。

ここは地下室なので
義理父の興奮した
息使いがより一層
響いて聞こえた……。

……義理父の臭い息が私の背中にかかる……。

初めは
肩から
揉み始め、
やがて手は
その手に
徐々の方に
下がって
行く……。

芋虫の様な指は
脇の下へ移動し、
時々膨らみ始めた
乳房に触れる……。

義理父は私の幼い身体を
何時間もゆっくり撫で続けた。

ピクッ

最初は気持ちが悪くて
吐きそうだった。

ゴツゴツして手は足の先から
ふくらはぎに移動し。

太腿から
お尻……

再び両手で
太腿を撫でまわし。

その内側にまで
手を滑り込ませて
来た。

気が付くと義理父は
私の小さなお尻を
揉みまくっていた。

私は段々と
頭の後ろが
痺れてきた……

ぬちぬち

ぎゅー

むにゅ

あん

ハッ

ハッ

義理父に身体中を弄られ
私はもうウタウタになっていた。

そして、強引に足を広げ
私の大事なところにも
触れてきた……。





気持ち
良いかい？

ゆっくり
気持ち良
なって行
感じ、
義理父に
気付かれ
いる。

あっ
……

んっ
……



んっ
……
あっ
……
んっ
……
あっ
……



は、はい。

もう、義理父の
手の動きは、
さっきと全然
違っていた。



はあ
……

そして
義理父は
たっぱり
時間をも
かきめら
膨らませ
始められ
胸を揉み
しだす。

むにゅ
……
むにゅ
……



んっ
……
あっ
……
んっ
……
あっ
……

この形最高だ！



この年齢でしか
味わえない……
微妙な膨らみ。

むにゅ
……
むにゅ
……





私の言う事を
聞いてたら何でも
買ってあげるし
幸せに暮らせる
からね……。

……はい。



良い子だ。



お尻を上げて。



……ああ、綺麗だ。

さあ、私の方を
見て座ってごらん。

この男、有り余る大金にものを言わせ、
普段から孤児院に寄付をしていたのだ。
そして自分好みの少女が見つかったと
手に入れ十二歳ぐらに育つまで
自分の娘として大事に育てているのだ。

……はい
義理父さま。

そしてその様子を
撮影し。

各界の金持ちに高額で
販売していたのだ。

……膨らみかけ
オッパイ……。

六十歳になる男が
子供の様に十二歳の
少女の乳房を吸う姿は
変態そのものである。

……ママァ……
オッパイ頂戴。

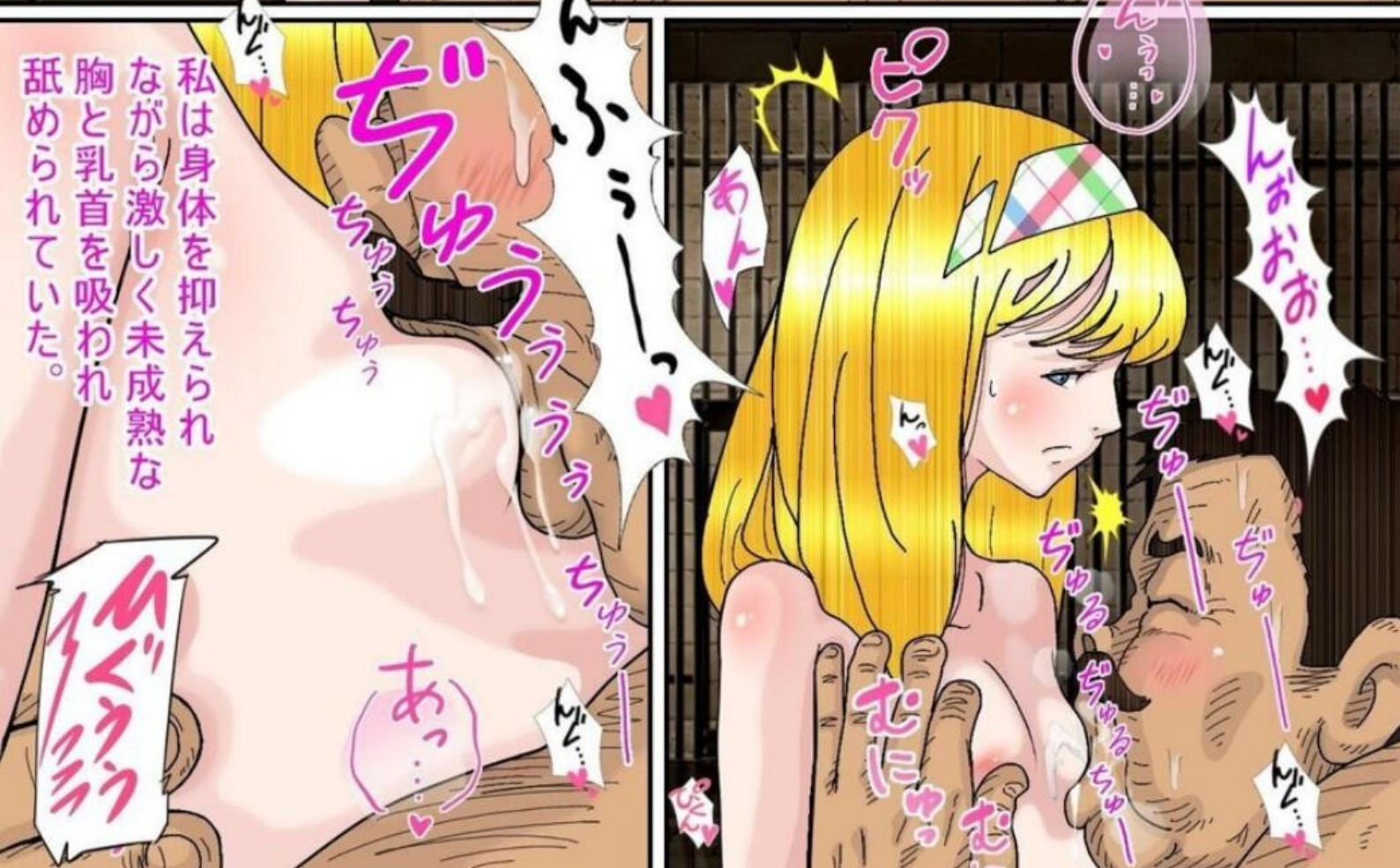
しゅ
しゅ

ああ……なんて綺麗で
可愛いオッパイなんだ……。

私の膨らみ始めた胸を見ながら、
義理父は嬉しそうに言った。
すると義理父は私の小さな乳首を
激しく吸って来た。



私は身体を抑えられ
ながら激しく未成熟な
胸と乳首を吸われ
舐められていた。







私は義理父の言う通りに、オチンチンを頬張ったまま回内で舌を動かして肉棒舐めた。

…凄く良いよ！



口の中で舌を使って舐めなさい。

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく



ああ…！イク…イクよ！出る…！

義理父は私の後頭部を力強く両手で抑えて、ピクピクって身体を震わせました。

どくどくどくどく

ビュルビュル



全部呑みなさい。

私は初めての精液の苦くて不味い味を必死に我慢しながら…涙ぐみながら精液をゴクンと呑みこんだ。

はぁ♡

はぁ♡

ゴクン

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

義理父は朝まで私のお腹や脇腹を舌先で舐めてきた。その後は腕や肩、脇の下や首筋までも…裸になった上半身を舐め回された。

貪るような激しいキスをされ、唇の間から舌をねじ込まれた。

キスをされた後、また全身を舐め回された。また、義理父の舌が全身を這いまわり小さな胸やお尻は唾液でベタベタになっていたと思う……。

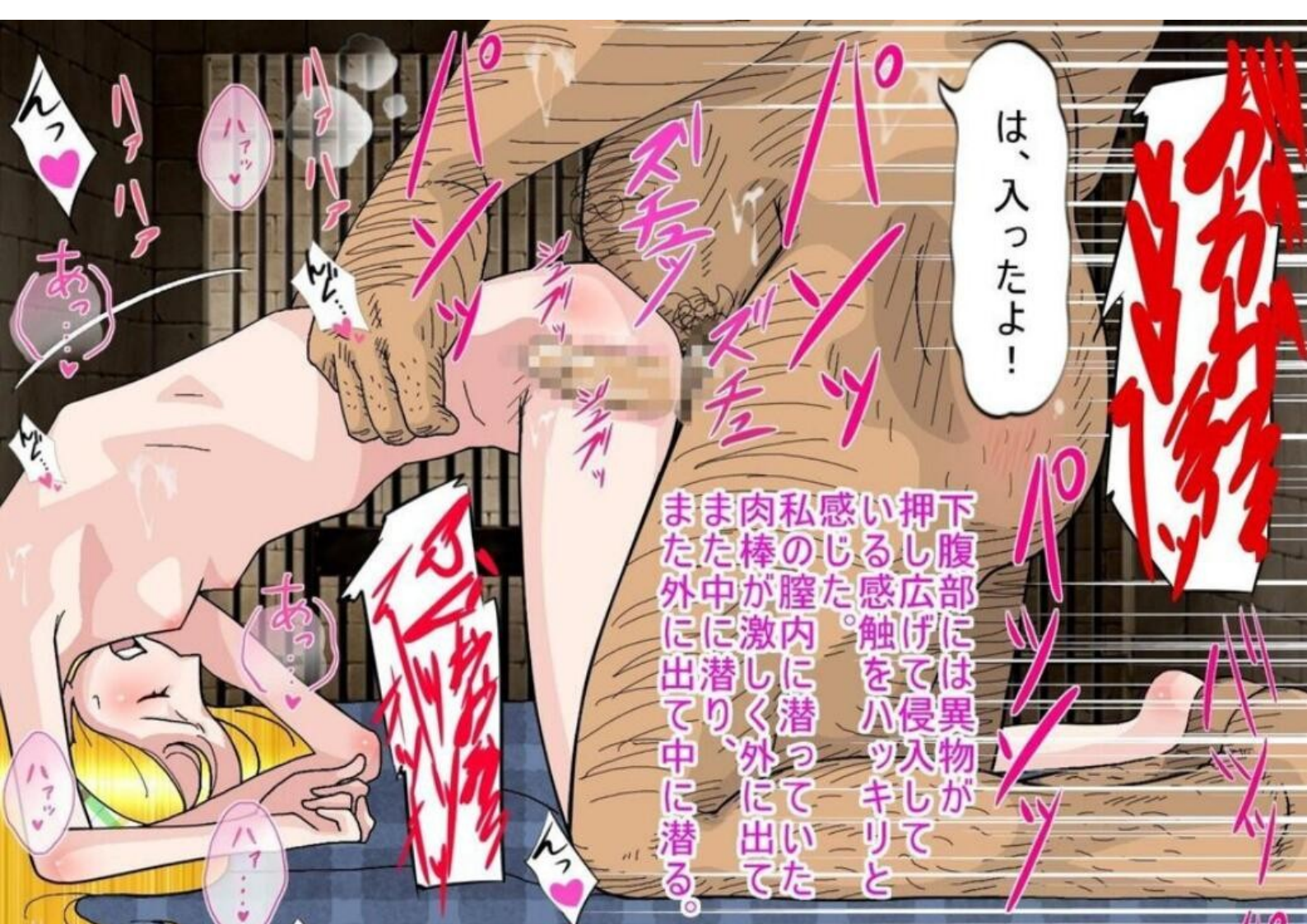
私は舌が絡まりあう気持ち悪さに耐えていたが狭い回の中では簡単に捕らえられネットリと絡まされた。唾液も容赦なく口内に入れられた。

よい、入れる……！

義理父は肉棒をにすり付け、中に入り込んだ。

ニユルっていうか、ズブっていうか、そんな感じ。膣内に潜っていった。





は、入ったよ!

下腹部には異物が
押し広げられてハッキリと
感じる。触るハッキリと
私棒の内に潜っていた
肉棒が激しく外に出て
また外に出て中に潜る。



義理父は
肉棒の入れを
出し入れを
続けた。壁が
私の肉棒の
義理父の
肉棒を付けて
締め付けて
気持ちいい
よさそうに
していた。



身体を愛撫される時は、
次第に自分の意志とは、
関係なく身体が反応するよう
な関係なく、まだまだ、未発達
な肉棒が潜入されるのは
たまたま痛みと異物感だけ
感じなかつた。

んぐわわわ



1

ア
コ
イ
コ
イ



あん♡

2

はあ、



義理父は腰をビクッビクッと震わせながら、精液を最後の一滴まで私の膣内に放出した……。

：最高だったよ
これからも毎日
マッサージして
あげるからね……。

……ああ……。

私は十五歳になるまで
義理父に何度も身体を求められ
こうやって性的虐待を受けていた……。

勇気を振り絞って義理父との関係も
彼に話した……。
彼は信じられない様子で話を聞いていたが
私が苦しんでいる事を親身になって
聞いてくれた。
そして私は
卒業と同時に
彼と駆け落ちを
した。
義理父が私を
探さない自信が
あった。
ある年齢を
過ぎた私には興味がない。
あの男は生粋のロリコンなのだから。

おわり

私は同級生の
彼氏ができた。

彼はとても優しく
何でも話を聞いて
くれた。

友達のおじさんにしえプされた話。





初めてレイプされた時の事について
ここで初めて話したいと思います。



私は中学校に上がる手前の時に
友達のお父さんにレイプされました。



それは、突然の
出来事でした……。



あれは私が小学校六年を
卒業する手前の
事でした。

友達のお父さんは、
私の制服姿が見たいと
言うので真新しい
セーラ服で友達の家
に向かいました。



私は友達の家に着いたら
この間途中まで一緒に
ゲームをした続きをやりたいなあ、
とかそんな事ばかり考えていました。



そんな何気ない普通の事を
考えながら電車で揺られて
いました。

タタッ
タタッ



タタッ
タタッ

……だから、あんな怖くて、
恥ずかしい出来事が起こるなんて
思ってもいませんでした……。





こんにちわ。

いらっしやう。



さあ、入って入って。
エアコン効いてるから
中は涼しいよ。

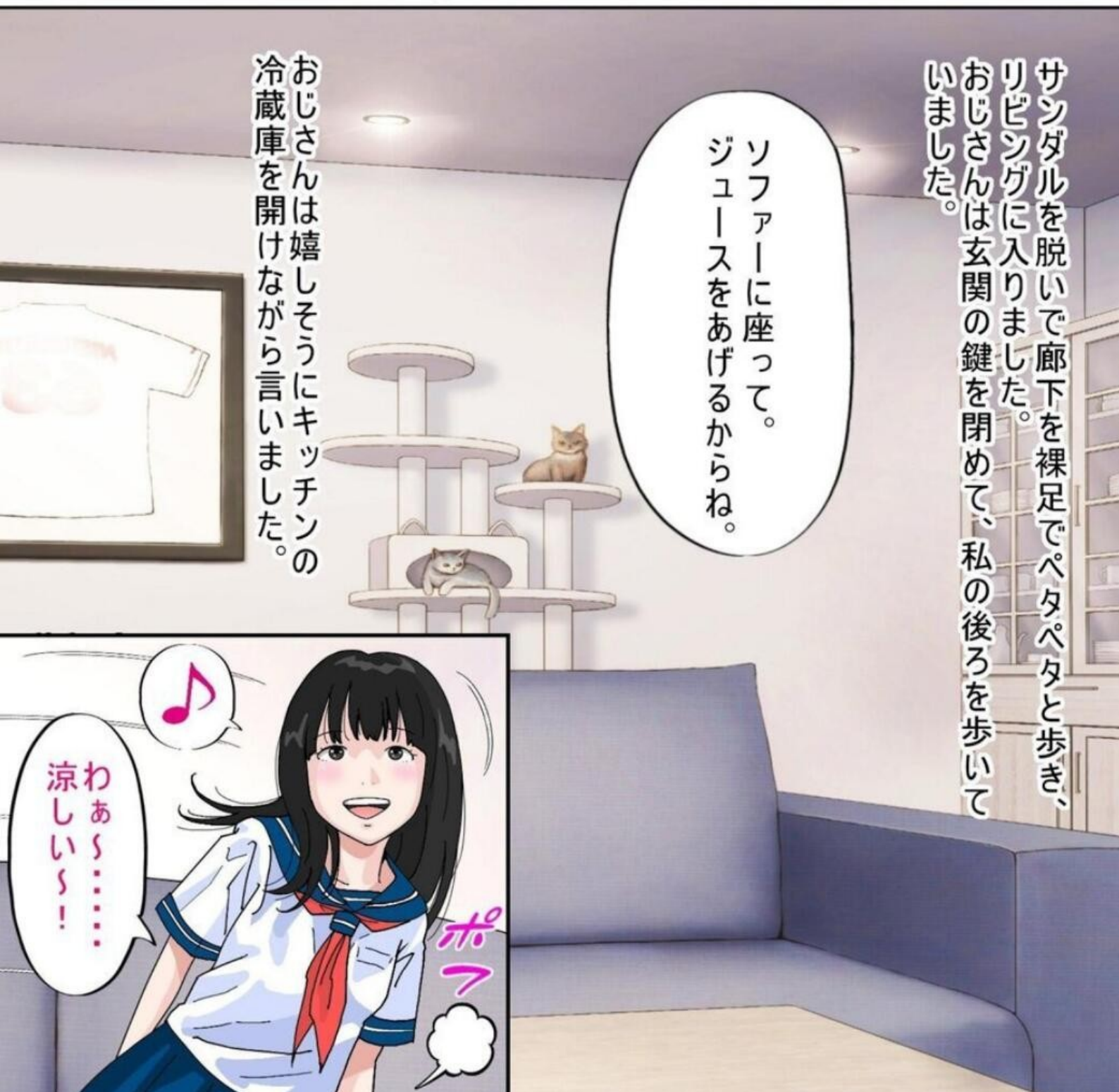
その日はまだ四月前だったのですが、
凄く暑かったのでよく覚えていました。



お邪魔します。

よく来てくれたね！

家に入ると、
おじさんが笑顔で
迎えてくれました。





アキちゃんとお婆さんのはいないの？

私はソファアに座りながら、友達（アキちゃん）とお婆さんの二人が居ないことに気づいて聞いた。

あつ、二人は明日まで居ないんだよ。

お婆ちゃんの家に泊りに行っててね。

おじさんはオレんじジュースを渡しながら私に言いました。

え……そうなんだ……

当然二人も居ると思って泊まりに来たので、私はびっくりしました。

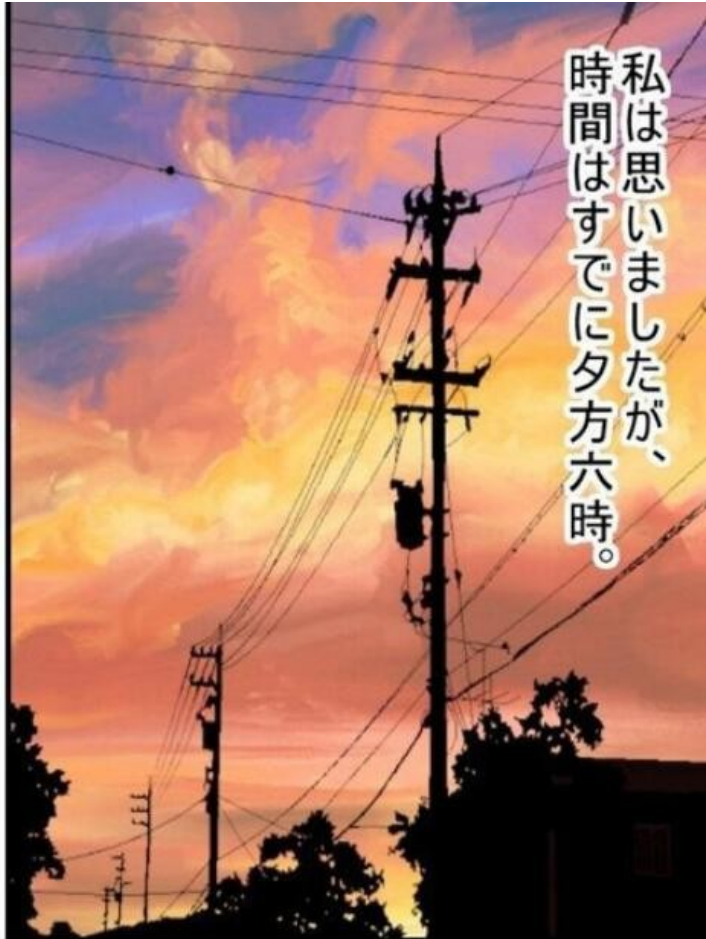
ごめんね。言ってなかったかな？

……帰ろうかな……

家におじさん一人で寂しかったから、由香ちゃんを呼んだんだ。

おじさんは私の隣に座って言いました。

私は思いましたが、
時間はすでに夕方六時。



アキちゃんのご家族に
宜しくね。

うん♪



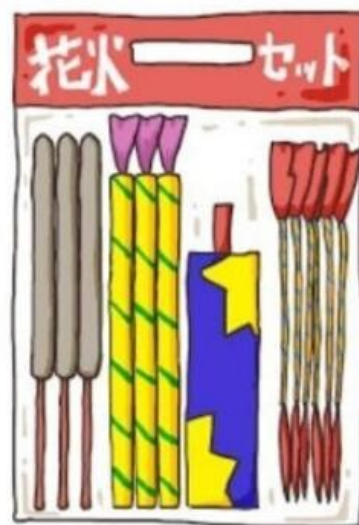
行って
らっしゃい。

家族ぐるみで仲が良くて、おじさんとも
もちろん仲良しだったので、

うん…
いいよ！



と、結局泊まることにしました。
おじさんが相手だったし、
私は小学六年の子供だったから、
全く警戒もしてなかったですね。



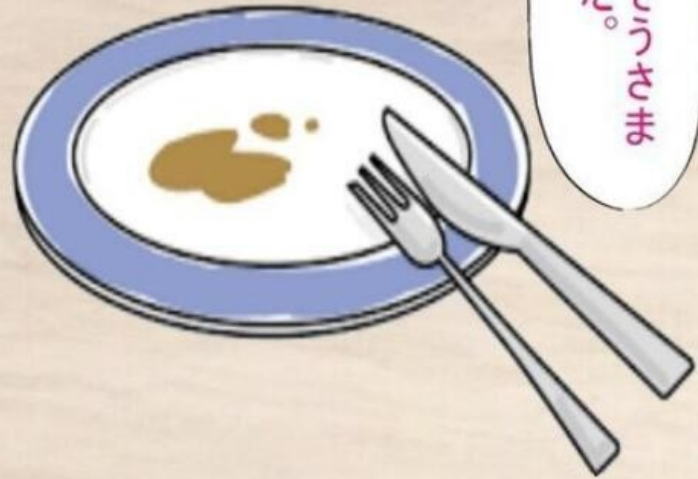
おじさんはソファアの隣に
置いてあった買い物袋から
花火を取り出して言いました。

たまには、おじさんと
二人で楽しいこと
沢山しようよ。



花火も買って
来たし。

ごちそうさま
でした。



友達の家で
おじさんと二人きり……。

この後のことは私は全く
想像すらしてませんでした。



晩御飯を食べた後、おじさんと
私はリビングのソファアームに座って
テレビを観ていました。
私も二人きりだと言う事を
特に警戒や意識をすることなく、
おじさんと会話をしながら
テレビを観て
いました。

由香ちゃん呼んで
良かったよ。

一人で寂しくテレビを
観るなんて我慢
出来なかったから(笑)

アハハ



おじさんは嬉しそうに私のすぐ隣に
近づきながら言いました。

おじさんも
良かった。
良かった。
良かった。

午前中に仕事があつて行けなかった
んだよ。

確かに夜一人
だと寂しいよね。

頭を撫でたり、
肩を軽く抱き寄せ
たり程度の
スキンシップは
軽くあつたから

あ



私も特に
気にして
いませんでした。

でしょ？
由香ちゃんに
来てもらって
嬉しいな。



ソファに座ったまま、私はおじさんに背を向けてソファの横の床に置いてあった花火の袋を除き込みました。



ねえ、おじさん。花火まだやらないの？



ソファの上から床に置いてある買い物袋を除き込む形だったから、

私はおじさんに背を向けて、更にお尻も向けていたような形に思っています。

花火しようよおじさん。



…由香ちゃん。



私は花火の入った袋をゴソゴソと触りながら言いました。

ごめんね、
由香ちゃん…。
おじさん…。
もう我慢
出来ないよ

この時、子供ながら
おじさんが普通じゃ
ないと気付き
ました。

ズイッ

えっ…、
何が…？

と私が言いかけた時、おじさんは
私に強く覆い被さり、首筋を舐めて
きたのです。



私は何が起こったのか、理解出来ませんでした。
いきなりおじさんが覆い被さってきて、身動きできない
私の首筋を舐め回してきたのです。
更に首筋から耳辺りまで唇と舌先で舐められ
ました。

やっ…!!
な、なに!?



やめて
うじさん!
なの?

舌で私の耳の穴を舐められ
気持ち悪さで身体が
ゾワゾワツツと反応して
しまいました。



両手でおじさんの身体を
バシバシ叩いたり。



首筋から耳、耳の穴
何度か唇も舐められ
ました。



おじさんは舌を
私の口の中に入れて
こようとしましたが
必死で抵抗しました。



おじさんの手は
いつの間にか
服の上から
私の胸に触れて
いました。



痛い痛い
止めて！
痛い！

まだ胸はわずかに膨らみかけの
ぺたんこの胸を



両足を
バタバタ
させて激しく
抵抗を
しましたが、
小学六年の
小柄の
子供が



大人の
力に勝て
ませんでした。



何度も唇を
しつこく
舐められ
ました。



顔中をおじさんの
臭い唾液で舐め回され



胸を揉まれて
叫びました
おじさんは
やめてくれず



まだ新しいセーラ服が
おじさんの大きな手で
胸を揉まれるたびに
しわくちゃになって
行きました。

…由香ちゃんの
膨らみかけたオッパイを
揉みまくるのが夢だった
んだよ……



おじさんは再び
私のわずかに
膨らんだ胸を
揉み始めました。



唇を重ねられて
声が出せない
状態でも私は
激しく抵抗
しました。



左右の頬を両手で押えられ、
顔を背ける事ができずに、
私は無理やりおじさんと
見つめ合う形になりました。

恐がらないで
大丈夫……

やめてよ……
なんで……



私はびっくりして回を必死に閉じましたが、前歯や歯茎を舌でねつとりと舐められました。



息苦しさと気持ち悪さで回を少し開けてしまいました。その瞬間おじさんは私の回内に舌を入れてきました。



私のファーストキスは、貪るような激しい大人のキスでした。



おじさんに顔を押し入れられながら、舌と唾液が絡み合う激しいキスを無理矢理されて、私はシヨツクで泣いてしまいました。おじさんが唇を離すと、私は腕で顔を覆い隠しながら涙を流して泣いていました。



私が泣いていると、おじさんが私のTシャツを下から捲り上げてきました。腕で顔を隠して泣いていたから、おじさんの動きが見えず全く反応できませんでした。

いやあー!!
やめてえ……!!

私は泣きながら捲り上げ
られたセーラー服を
下ろそうとしました。

でも、やっぱり
大人の男性の
力には敵いません
でした。

やあッ

ピリッ……
と新しい
セーラー服の
破れる音が
聞こえ、
私は力を
緩めてしま
いました。

お母さん……
助けて！

セーラー服を
脱がされた
私は下着の
スポーツブラ、
パンティー、
ソックスだけ
しか身に着けて
いません
でした。

怖いよ……
おじさん。

……もう、
止めてよ。

……良いね。

やあ……

でも、おじさんは
白い下着とソックス
姿の私を見て
凄く興奮
していました。



私は、スポーツブラも



パッティーも
脱がされ

露になった私の膨らみかけた
胸を見ながら、おじさんは
嬉しそうに言いました。

ああ……なんて
綺麗なオッパイ
なんだ……。

……いやあ、
見ないでえ……。

かあああ

ひゅん

ハッ
ハッ

やあ

私は涙を流して泣いていました。
するとおじさんが何の前触れもなく
いきなり覆い被さってきました。

ザバァ

ズ
ッ
ッ
ッ

ギョッ

由香ちゃん！

ひっ!?

ムギバァ
ムギバァ
ムギバァ



喰るような
 激しいキス。
 更にまた舌や唾液を
 絡まされました。

口いっぱい胸を含み
 舌先で乳首を転がして
 きました。



私の顔は唾液と、泣き顔で
酷いものだったと思います。



わっおあ...

頬を濡らしていた涙さえも
おじさんに舌先で舐め上げ
られてしまいました。



私はまた激しく
泣いていました。

やああ...
もうやめて。



めっちゃめっちゃ可愛いよ
由香ちゃん.....

由香ちゃんの足、
たまらないよ。

おじさんは愛おしそうに私の足に
頬擦りし舌先で舐めていました。



更には足の指まで
しゃぶられました。

撫で回されました。



ぞわわ
ぞわわ

いつも優しくかったおじさんに襲われて
全身裸にされ、激しく舐められ、キスされ、
恐怖で身体が震えて動くことが出来ませんでした。



小さなお尻も撫でられ
頬擦りされました。

ああ…、
由香ちゃん
の
体温を感じるよ。

そう言うとおじさんは
服と下着を脱いで
裸になり私に
覆い被さって
来ました。

裸で抱き合うと
気持ち良いね！

…いやあ…！
いやいやあ…！

…愛してるよ
由香ちゃん…

私は声にならない声を上げました。
でも、口が開いてしまい、また
舌を入れられてしまいました。
おじさんは私の胸を揉んだり激しく
指で摘んで弄りながら、舌と唾液を
また絡めてきました。

と嬉しそうにおじさんは言っていました。
当時の私にはその意味が分からなかった
ですが…

…小さな乳首が
小さく勃ったね…

乳首を摘まれて私は痛みで
ビクツツと反応して
しまいました。
気持ち良isanなんて
ありませんでしたが、
おじさんは…

乳首で反応
しちゃったね…

そして、おじさんは
私の両足を左右に
開いていきました。



アソコを激しく舐められ、
太腿の付け根回りも
舌先で舐められました。
その間も膨らみかけの
胸からおじさんは
手を離さず揉み続けて
いました。

…マンコ！
…マンコ！
由香ちゃん！

んぐんぐ

やだあ…
ああっ…
やめんっ…
やめてえ！



身体をジタバタと動かして、
舌先がアソコを刺激する度に
くすぐったさにビクッとして
しまいました。

にゅにゅ

可愛いね、小学生
だけど、ここに反応
するなんて…

気持ち良かった訳では
ありませんが、おじさんは
喜ぶと言っていました。



舐められた時は抵抗
しましたが、やはり
力で勝つことは出来ず、
最後はお尻の穴も
激しく舐められて
しまいました。

ああ、由香ちゃんの
尻の穴美味しい…

はぁ♡

アソコとお尻の穴をネットリと
舐められ、どちらもおじさんの
垂夜でベトベトに濡れていました。





やあつ…

おじさんの醜くて熱くて
硬いオチンチンを
私は、無理矢理握らされ
ていました。

ああ…由香ちゃんの
手は柔らかくて
気持ち良いよ…。



そしておじさんは私の鼻先に醜い
オチンチンを近づけてきました。
とても臭くて、お父さんと違って
皮を被っていました。



私は息苦しさに耐え、
オチンチンを
頬張りました。



ほら、口を開けて
オチンチンを咥え
て由香ちゃん！



おお！もっと
…奥まで！

私の頭をグイッと押して
強引にオチンチンを
口に押し込んできました。



良いよ、由香ちゃん、
凄くエロくて気持ち
良いよ…！！







いやあ...!!
痛いよ!!!

はっ...
入ったよ...
...由香...

ああ...!!
狭くて、気持ち
良い...

おじさんの熱くて
大きなモノが
私の小さなアソコの
肉壁を押し広げて
ズブツと言う感じで
私の中に潜りました。



私の膣内に潜っていた
肉棒が外に出てまた
中に潜り、また外に潜り...

ああ...!!
動かないで!

なるべく
痛くしない
からね!

でも、身体を愛撫される時は、
次第に自分の意志とは関係なく
身体が反応するようになっていきましたが、
まだ未発達の膣内に肉棒を挿入されるのは、
ただただ痛みと異物感しか感じませんでした。

ごめんね、由香
...でも、気持ちいいよ!

最高だよ! 由香!

痛いっ...んんっ
...ああ...やあ!

と声を上げて
いました。

おじさんが容赦なく腰を
動かす度に私は、



身体が反応しちゃうね。
良いんだよ、大丈夫だから。

可愛いよ、由香！



最初は痛みとくすぐったさ
だけでしたが、

ちよっとづつゆっくりと
刺激を感じるようになって
いました。



薄暗い照明に
照らされた
夜の部屋の上で、
ソファの私に、
小学六年の私は、
全裸で全身を、
激しく愛撫され、
肉棒を突かれ、
次第に身体が、
反応を抑えられず
小さな声を
漏らして
いました。

もうHに
なったかな？





…由香、最高に
気持ち良かったよ…



おしさんか…肉棒を
引き抜くと、アソコから白い
ドロドロの液体が、垂れて
きたのを見ました…

…あぁっ…



小学六年の私はこれが
セックスでこれが中出し
と言う事が全く理解して
いませんでした。

こんな事してゴメンね。
でも、由香ちゃんの事が
大好きでたまらないんだ…

…もうやだ…
やめて…

もうやめられないよ。
朝までじっとり、
ゆっくりと由香ちゃんに
エッチを覚えて貰う
からね…

…うっ、ひっく…
酷いよ…おじさん…

おわり

疲れたニャン



ハチちゃん×ス11歳